

恋は忘れた頃にやってくる

プロローグ

初めて足を踏み入れる高級ホテルのエントランスを眺めて、私は息を呑んだ。

しっとりと落ち着いた雰囲気の中、天井のアートワークがキラキラと輝いている。

わあ……素敵。

こんな場所に来るなんて、友達の結婚式以来だ。

淡いピンクのワンピースに身を包んだ私は、慣れないヒールの音を響かせ、会場へ急ぐ。

——LOVENT^{ラヴェント}パーティー会場。

そう書かれたホールを見つけると、「よし」と気合を入れて中へ入った。

そこは、結婚相談所「LOVENT」に入会した人だけが参加できる婚活パーティーの会場だ。

二十七歳になったし、私もそろそろ結婚したいなーなんていう軽い思いで参加することにしたのだけど、想像以上にたくさんの人がいて驚いた。

最近では晩婚化が進んだり、自立した女性が増えたりしたこともあり、独身の人が多いとニュースでよく耳にする。

確かに結婚だけが幸せじゃないし、結婚がゴールだとも思わない。

だけど私は、やっぱり家庭というものに憧れるし、できれば子どもも欲しい。

きつとここにいる人たちは、私と同じような志を持つているんだろ？と、少し心強く思った。パーティは立食形式で、テーブルには美味しそうな料理がいくつも並んでいる。それを目にした私は、ゆつくりと食事を楽しんでいる場合ではないとは分かりつつも、お皿に取って食べ始めてしまった。

「ん〜、美味しい」

近くを通った男性ウェイターからシャンパングラスを貰って、出会いそつちのけで舌つづみを打つ。

……って、こんなことをしている場合じゃないでしょ、私！

今日はわざわざ美容院でヘアセットをしてもらったし、最新のメイクを施すために百貨店で道具一式揃えてメイクレッスンもしてもらったじゃない。

花より団子になってどうするの！

そう思いながらも、ローストビーフをはむつと頬張った。

私、田中琴美、二十七歳、彼氏ナシ——は、ベビー用品メーカー、ラブベビチルドレン株式会社の品質管理部に勤めている。

平々凡々で目立つことなく、逆に地味すぎて周囲から浮くということもない、穏やかな毎日をごしているOLだ。

仕事は華やかではないものの、充実しているしやりがいを感じている。

残業はあるけれど、プライベートな時間がないわけじゃないし、大好きなカフェめぐりもできていて、大きな不満はない。

ただ、恋愛は昔から苦手で、今まで付き合った男性の人数は一人。

大学生のときに付き合い始めたその彼には、数カ月で『ごめん、他に好きな子ができた』とあっさりフラれてしまった。

もっとも彼は、周りが羨むくらいのイケメンで、どうして私なんかと付き合ってくれるのだろうと不思議に思っていたくらいだ。

当然、告白されたときは、「騙されてる?」「ドッキリなんじゃないの?」と疑った。

そう、疑ったのだ。……疑っていたのだけれど、素敵な彼に舞い上がり、ハピネス状態になったところで急降下。

結局、「騙されてる?」の予感的中した。どうやら男性経験のない女性を何人落とせるか、友人の中で競い合っていたみたいだった。経験値ゼロの私は、まんまとその罠に引っかかってしまったという散々な思い出だ。

短期間でもあんなイケメンと付き合えたならよかったじゃないか、と友達からは慰められたけれど、当時の私は傷心のあまりワンワンと泣いて引きこもった。

そして心に固く誓う。

——二度とイケメンは信用しない、と。

そんな私は、今日ここに平凡でも誠実な男性を見つけるために来た。

会場のライトに照らされて、手にしたシャンパングラスの中の気泡がキラキラと輝く。すぐく綺麗だなど見とれていると、背後から声をかけられた。

「久しぶり、田中琴美さん」

え？

低くて落ち着きのある声色にフルネームを呼ばれ、驚きのあまりグラスを床に落としそうになる。えっと、えっと……

……何が起こっているのか理解するまでに時間がかかった。

私の前に現れたその男性は、長身ですらつとしたモデルのような体型をしており、嫌味なほどスーツが似合っている。

男らしい顔立ちでありながら、にこつと微笑む様は少年っぽくて可愛らしい。

どこからどう見ても素敵だけど、私は彼を一目見て顔が引きつり、金縛りに遭ったように動けなくなった。

「どうして君がこんなところにいるのかな？」

「……あの、え、つと……」

目の前の男性の名は、青山蒼汰。三十二歳でラブベビチルドレン関西支社のマーケティング部長だ。

本社に勤める私とは、オフィスも部署も違うのだけど、二年前まで彼は本社の同じフロアで働いて毎日顔を合わせていた。

そのときに、ちよつといろいろあつて……

とにかく彼は、青山蒼汰という名を具現化したような爽やかなイケメン。それゆえ、私のとても苦手とする類の人……

そして、絶対に再会したくない相手なのだ。

「確か、恋人ができた、と聞いていたんだけど？」

「え、ええ……」

「それから、ゆくゆくは結婚するとも」

ううう……

彼に問い詰められて、言葉が返せなくなる。

私は以前、青山さんに告白され、「好きな人がいる」と言つて断つたことがあるのだ。それからその人と結婚を考えている、とも。

「まさか、嘘だったの？」

「い、いいえ……そんな……」

「でもおかしいよね。こんなところにいるってことは、今、フリーってことでしょ？」
婚活パーティに参加しているのだから、必然的にそうなる。言い逃れはできない。

「……そ、それよりも！なぜ、青山さんがここに？ 関西支社勤務ですよ？」

「うん、本社に戻ってくることになってね」

「そう……なんですか……」

「ということは、また同じオフィスで働くことになるのか。思わず、顔をしかめる。」

「あからさまに嫌そうにしないでくれる？」

「い、いいえ！ そんなことはない」

「そうだ、別に嫌なわけじゃない。」

青山さんは優しい上司で、すごく仕事ができるし、彼がいると会社が目覚め華やかになる。

まだ業界に参入したばかりで、大手メーカーに負けないようにと頑張っているうちの会社に、ベ

ビー用品最大手メーカーのビジュアルからわざわざ転職してきた、ありがたい人だ。

彼が来てからというもの、業績が著しく伸び、ブランドの知名度が一気に上がった。

大手に勤めていた経験を活かすつも、大手ブランドではできないような企画を立てたり、お

客様からの声を積極的に商品に反映したり。安全面でも価格面でも評価の高い商品を次々と開発し、

うちの会社を軌道に乗せた人物だ。

そんな青山さんのことを心から尊敬しているし、嫌いなわけがない。

けれど……

彼は私の最も苦手とするイケメンという部類に属している男性なのだ。

こんな格好いい男性を裸眼で見ると、キケンだ。メガネで防御力をアップしなければ！

私は激しく動揺しながら、バッグの中から伊達メガネを取り出して装着した。

なぜか青山さんは、昔から必要以上に女性に気を持たせるような態度を取ることが多い。そして、

そんな彼とはいろいろありすぎて、気まずいどころの関係ではないのだ。

どうしよう、これは史上最大のピンチかもしれない。

波乱の予感を覚えつつも、とりあえず苦笑いをした。

遡ること、二年前――

当時二十五歳だった私は、社会人三年目である程度仕事にも慣れ、毎日楽しく会社で過ごしていた。

「田中さん、このチャイルドシートの検査はもう終わってる？」

品質管理部長から声をかけられ、私はパソコンから目を離し、部長に向き直る。

「はい、終わっています。私と上野さん、山口さんの三人でチェックしました。特に大きな問題はありませんでした」

「そう、ありがとう。じゃあ、工場にメールしておいてくれる？」

「はい」

私は新モデルのチャイルドシートの品質チェックが済んだことを工場に知らせる。

私たち品質管理部は、製品の品質や安全性をチェックしたり、ユーザー様と直接やり取りをして改善点を検討したりする部署だ。

特に商品に不具合があつてはならないので、何度も何度も厳しく検査を行う。

もともと私は心配性だから、しつこいくらい確認するのは得意。入念にチェックをしすぎて先輩

たちに呆られることもしばしばあつた。

でも、それくらいでちょうどいいと思っている。だって赤ちゃんって家族にとって本当に大事な存在なのだ。絶対に何かあつてはいけない。

工場へのメールを確認して、これで完了だとホッと一息ついていると、オフィスの入り口から声がした。

「お疲れさまです！」

ハッラツとした声だ。

同じフロアを使っているマーケティング部の青山さんが外回りから帰ってきたのだとわかり、私は顔を上げた。

彼は二年前に大手ベビー用品メーカーからうちの会社に来てきた男性。人一倍元気でテキパキと仕事をこなし、毎日忙しいはずなのにすごく楽しそう。

この仕事が本当に好きなんだろうな、と見ていて気持ちがいい。

コミュニケーション能力にも長け、どの社員にも分け隔てなく接し、誰からも好かれている。

私みたいな地味な社員にまで笑顔で話しかけてくれる、そんな素敵な人……なのだけど、私的には、あまりかわりたくないと思つている。

イケメンが苦手な私にはなんだか眩しすぎて、近寄られるとどうしていいか分からなくなるのだ。遠くから見ているほうが安全というか、なんというか。

パソコンに隠れながら青山さんをごっそり見ていると、バチツと目が合ってしまった。

……げっ！

急いでパソコンに隠れたものの、時すでに遅し。

「田中さん。この前の指摘どうもありがとう。抱っこ紐ひもの新カタログにさっそく反映しておいたよ」

「……そうですか、それはよかったです」

そっけなく答えたのに、青山さんがこちらに近寄ってきた。爽やかな笑顔を向けられた私は、さっと視線から逃れるように俯うつむく。

別にわざわざ個別にお礼を言われるようなことはしていない。

先日マーケティング部から新しいカタログのサンプルを貰ったところ、抱っこ紐ひもの説明の中にもう少し書き方を変えればいいのと思う箇所があった。

私たち品質管理部はユーザー様と直接やり取りをすることが多いので、「こうだったらいいの」とか「こういうのが欲しい」という声をよく耳にする。

なので、キャッチコピーを変えたほうがよりお客様に興味を持ってもらえるのではないかと、思ったことをちよつと口にしただけなのだ。

しかも彼ではなく違う人に伝えたのに、こうして青山さんからお礼を言われるなんて。女性社員たちの視線がこちらに集中して気まずい。

「田中さんって、いつも鋭い指摘をしてくれるから助かってる。さすがだね」

「……いいえ」

ブルーライトカットのメガネをくいつと押し上げて、私は俯うつむいたまま彼から顔を逸らす。

ああ、もう。早く向こうに行ってくれないかな……

青山さんは苦手だ。とにかく格好よすぎる。

意識してやっているのか、そうでないのか分からないけれど、こんなふうに優しく微笑んだり、「気が利くね」なんて褒めたりされたら、大抵の女性はキュンとトキメクだろう。

私はイケメンバリアーを張っているので彼の攻撃は効かないものの、実際にこの会社では彼を好きだと言っている女性も多い。

どうせだったら、この優しさを私に向けるのではなく、彼女たちに向けてほしい。

そう祈っていたのに、さらに話しかけられた。

「ねえ、そのメガネ、度が入ってる？」

「へえっ!？」

急に予期せぬことを聞かれて、私は思わず間抜けな声を出してしまった。

青山さんは私の顎あごに手を添えて顔を上げさせる。そして指でブリッジ部分を持って、ひよい、とメガネを取り上げた。

一体何が起きたのかと私は口をあんぐり開けたまま、彼の顔を見つめる。

「入ってない。やっぱりそうだね。後ろから見たとき、景色が歪ゆがんでなかったから」

ど、どどどど！ どこからどうツッコんだらいいのか分からない。

どうして私が、顎あごクイくをされているの？

そして、私のメガネのレンズを背後から見えていたって、なんで？
何がなんだか分からなくて、ただただ混乱中！

私は視力がよくてメガネなんて必要ないが、あまりにも青山さんが眩しいからプロテクターとしてかけていたのだ。それが、こんな簡単に外されてしまうなんて。

ふと彼の秀麗な顔が近づいてきていることに驚いて、呼吸を忘れる。

「メガネをしていると聡明な女性に見えるけれど、外すとあどけなくて可愛いんだね」
「なっ、な!？」

あなたは一体、私をどうしたいの！

メガネを外されてしまつて防御力ゼロの私は、モロに彼の言葉責めを受けてしまった。

あまりの攻撃力に耐えきれなくなり、彼の手からメガネを取つて覚束ない手つきでかけ直す。

「や、やめてください!」

「ごめん、つい」

あまりにも必死に奪い返したからか、青山さんは申し訳なさそうな表情で私を見つめている。

そうですよ、申し訳なく思つてください、急にこんなことをされたら困ります!!

せつかく平凡に生きているというのに!!

「田中さん、ごめんね」

ううううっ。そう思っているなら、早く私から離れてください。

再び視線を外して俯いていると、彼はやつと私から離れていってくれた。

周囲の視線が痛い。大きな声を上げてしまったので、何事かとこちらを見ていたのだろう。
女性社員たちの眼差しには羨望と嫉妬が混ざっている気がする。

別にこれは嬉しい出来事でもなんでもないんだから。私にとってはとても迷惑なことなんです！

無駄だと知りつつも声に出さずに言い訳する。

それにしても、青山さんは離れていったのに、まだ胸のドキドキが止まらない。

しつかりしろ、琴美！ もうイケメンに近寄つてはいけない。絶対に！

それから数日後、青山さんの転勤が発表された。関西支社のマーケティング部部长に昇格するぞうだ。

これで不必要に構われることはなくなるのだとホッとしたのと同時に、少し寂しい気持ちも感じる。

青山さんがうちの会社に来てから社内の雰囲気が一気に明るくなって、親睦会と称した飲み会が頻繁に開かれるまでになった。

そのおかげで、社員の間信頼関係ができて仕事が円滑に運ぶようになっていた。

いつも皆の中心で場を盛り上げていた青山さんがいなくなるのを残念に思う気持ちもあるのだ。

まだ実感が湧かないなー、なんて考えていると、青山さんから急に名前を呼ばれた。

「田中さん。俺の送別会、絶対出席してね」

「え!? げほっ……ごほごほ!」

突然の呼びかけにむせてしまう。ぶわっと汗が噴き出て、顔が熱い。絶対に赤くなっているはずだ。

「青山さん、なんで田中さんをご指名なんですか〜？」

私が返事をする前に、青山さんの隣にいた男性社員が冷やかすように彼を肘でつついた。すると青山さんがにこっと私に視線を送ってくる。

「田中さん、飲み会にあまり来てくれないから。最後まで参加してほしいなと思って」

「だってー、田中さん！ 青山さんから直々のご指名だから、参加でいいよね？」

なんでそんなこと言うかなあ！ 皆の前で言われたら断れなくなるじゃない。

あわあわしながらも、無言で頷く。

「よかった」

もう、なんなの、その嬉しそうな顔は。

こうやって気を持たせるようなことをされたら、好かれてるんじゃないかと錯覚しそうになる。

大方、青山さんは、飲み会参加率の低いレアキャラを誘って喜んでいるだけなのだろう。それ以上でもそれ以下でもない。

こんな思わせぶりな彼の態度に振り回されるのも、これで最後だ。

断るチャンスもなさそうだし、最後までらい参加しておいてもいいかな、と私は送別会の参加を決めた。

そして青山さんの送別会、当日。

場所は会社の近くにあるイタリアンレストランに決まっていた。

カジュアルな雰囲気お味で、美味しいのにお値段はリーズナブルなお店だ。

外観は赤と白のレンガを組み合わせた可愛らしいデザイン。店内も家庭的で温かみがあって、なんだか懐かしい感じがする。

本格的なパスタやピザ、チーズフォンデュの他に、サラダバーもあってフレッシュな野菜が食べ放題。その上デザートもケーキやムース、タルト、パンナコッタなど、好きなドルチェが選べるコースを頼んだそうだ。

ああ、今から楽しみ。

いつもは、ダークカラーのカーディガンにパンツ、もしくはひざ下くらいのスカートという地味な格好の私だけど、今日は素敵なお店に入っても恥ずかしくないように少しだけオシャレしてきた。

別に青山さんの送別会だから気合を入れたというわけではない。

とろみのある白いシャツにミモレ丈のスカート。

これならそこまで派手でもないし、ちょうどいい感じはず。

ところが、朝から青山さんの視線をピンピンキャッチして、なんだか居心地が悪い。似合っていないと思われるのか、いつもと違うから変だと思われるのか。

あまりジロジロ見ないでほしいのだけど、そんなことは言えず、気まづいまま就業時間をやり過

ごした。

「じゃあ、青山さん、お疲れさまです！ 関西支社でも頑張ってください！ かんばーい」
やっと仕事が終わわり、始まった送別会。

隅の席に座るつもりだったのに、店に入るなり青山さんから「田中さんはここね」と、お呼びを
かけられた。なんと私の席は彼の隣になってしまう。

なぜ……っ!?

私は品質管理部の方たちと静かに食事を楽しみたかったのに！

私の周りには青山さんと上層部の方々、それからマーケティング部の男性たちがずらっと座って
いる。そして、私が一番苦手なので、料理の取り分けに追われた。

「田中さん！ サラダを取ってください。お願いしまーす」

「あ、はい」

「深田さん、ズルいです。僕のもお願い」

「は……はい」

マーケティング部の深田さんに声をかけられると、すかさず青山さんも頼んでくる。二人のお皿
を預かって、私は目の前にある木製のサラダボールから野菜を取り分けた。

「ねえ、田中さんが奥さんだったら、こうしていつも取り分けてもらえるのかな？」

また青山さんが変なことを言い出した。

ドキ！ じゃなくて、ギクッ。

私は体を強張らせる。

「青山さん、そういうの、セクハラになりますよ」

「ええ？ そうかー。それはいけないな」

深田さんにツッコまれた青山さんは、はは、と困ったように微笑んだ。

確かに他の男性が女性社員に言うセクハラだととられかねないセリフだけど、青山さんだと不
思議と嫌悪感を抱かせない。

イケメンってこういうとき、ズルいよね。

私ですら、「嫌だ、放っておいてー」と思うのと同時に、心の奥のほうでは嬉しく感じている。

そんな気持ちを悟られないように、私は平静を装った。ああ、つくづく素直じゃないな。

私の隣で美味しそうにご飯を食べ、ワインを飲んでいる青山さんをちらりと見る。「もうこれか
らは会えないんだな」と感傷的になってしまった。

青山さんはワインボトルを私に向けてくる。

「はい、どうぞ。ワイン美味しいよ」

「どう……も」

青山さんから赤ワインを注がれた。あまりワインは飲んだことがなかったけれど、彼に勧められ
るがままグラスを口に運ぶ。

芳醇な香りに誘われ、何度も口に含んでしまう。

「どう？ 飲めそう？」

「はい。私、ワインってあまり飲んだことがなかったんですけど、美味しいですね」

「よかった」

勧められるだけワインを飲み、目の前の美味しい料理を堪能していると、なんだかふわふわと心地よくなってきた。

隣にいるはずの青山さんの声が遠く感じられ、周囲の声もハウリングしているみたいだ。

ああ、楽しい。このままずっと、ふわふわしていたい。気持ちいいな……

一次会は二時間程度でお開きとなり、そのまま二次会へ行く流れになった。

明日は土曜日で休みだし、「青山さんの歌が聞きたい」という女性社員からの要望で、二次会はカラオケに決まる。

いつもなら絶対に一次会で帰るのだけど、今日は青山さんに腕を掴まれて帰らせてもらえず、私も二次会に行くことになってしまった。

カラオケルームに入り、青山さんの歌っている姿をぼうつと見る。イケメンな上に歌までうまいのかあ、と感心していると、深田さんが隣にやってきた。

「田中さん、大丈夫？ もしかして青山が異動になるから、ヤケ酒しちゃったクチ？ 結構シヨック受けている女子、多いからなあ」

「違いますよ。私はそんなじゃありませんから」

「はは、まあ、隠さなくても……」

「ほんとに、違うんれす！」

そんなわけないじゃない。私は青山さんのことなんて、全く――

「二人で何を話してるの？」

「おお、青山」

歌い終わった青山さんが、私と深田さんの傍にやってきた。そしてさりげなく私の隣の席に座り、ぴつたりとくつついてくる。……これはなんの嫌がらせなのかな？

「すぐく仲よきそうに見えたけど、何を話していたんだ？」

「大した話じゃ……」

深田さんの言葉に被せて、私は会話を切ろうとする。

「そうですよ」

けれど、青山さんにはっこりと微笑んだまま、詳細を聞かせろと言わんばかりに深田さんを見つめ続けた。

「青山が気にするようなことは話してないよ」

「……そう？ ならいいんだけど」

酔っているせいかな、会話の内容が頭に入っていない。ただなんとなく、二人の間の空気が悪い気がしたので、私は話を切った。

「あの……私、そろそろ……帰ります、ね」

「え？ もう？」

青山さんがなぜか焦った顔をする。

「はい」

「じゃあ、送るよ」

「いえいえ……。結構です。だって青山さんは今日の主役だから……。抜けたら、だめですよ」

誘いを断り部屋の外に向かうけれど、青山さんはどこまでもついてくる。

照明を落としたカラオケルームは暗く、私たちが抜け出したことに気が付く人はいないみたいで、誰も追いかけてこない。

このままついてこられたら困るのできっぱり断りたいのに、歩き出したせいでお酒が回り足元がふらついてしまう。

「大丈夫？ 送るよ」

「大丈夫……です、から」

「大丈夫じゃないよ」

突然、ぐつと強く肩を引き寄せられて、私の体は彼の腕に包まれた。

ど、どうしよう。こんなふうに男性に抱き締められるなんて初めてで、ますますクラクラしてしまふ。

私よりも遥かに大きな体を感じて胸の鼓動が速くなった。

その上、私、すごく酔っているみたいだ。気分が悪い。

「田中、さん？」

「うう……」

目の前がぐるぐると回り出して、支えてもらわないと立っていられなくなる。

自分の名前を呼ぶ声が遠くに聞こえるけれど、それ以外の言葉は何を言っているのか分からない。

青山さんに抱き締められたまま、私の意識は暗闇に落ちていった。

「田中さん。……いや、琴美ちゃん」

「ううん……」

私の名前を呼ぶのは誰……？

「琴美」

甘く優しい声色で、そっと囁くように名前を呼ばれる。

なんだろう、体がふわふわする。熱くて、苦しい。

全身に染みるような声にゾクゾクしていると、そっと肩に手を置かれた。

「服、苦しいっ」

「くる……し……」

「脱がせても平気？」

「あ……」

衣擦れの音がして、窮屈さから解放される。私はふう、と息を吐いた。

いつの間にか横になっているみたいだ。ふかふかのお布団の上について、ごろんと寝返りをうつこ
とができる。気持ちいい。

うつ伏せになると、髪を梳かれた。肩に温かくて柔らかい感触がする。どうやら肩にキスをされ
ているみたいだ。

「下着も脱がそうか？ 苦しいでしょ？」

「んー……」

「外すよ」

「あい」

ちゅっ、と甘い音を立てながら、柔らかいものが腕や背中にも触れてくる。大きな手が肌の上を
滑り、その温もりに心地よさを感じた。

「……あ」

ブラジャーのホックが外されて、さらに締め付けるものがなくなる。そして何もつけていない背
中の上を、指がそつとなぞっていく。それだけで私の口からは吐息が漏れた。

「は、あ……」

「今日、いつもより色っぽい格好していたよね。どうして？」

「どっ、して……っつて」

「俺がいなくなるから、少しでもオシヤレしようとしてくれた？」

俺が……いなくなる？

ああ、青山さんか。

そこでやっと、背中を撫でているのが青山さんだと理解した。

ぼんやりとした頭で彼の言葉を考える。朝からジロジロ見られていたのは、そう思われていたか
らだったのか。別にそんなつもりは……。せつかく飲み会に参加してほしいと言われたから、それ
相応の格好をしようと思っただけで。

でもそれって、そういうことになるのかな……？

酩酊した状態で、そんなことを考える。

「こんな可愛い格好したら、他の奴に狙われるんじゃないかって、すぐくハラハラした。これから
俺がいなくなるっていうのに心配だ」

「ふえ……っつ」

一体何を言っているのだろう？

「いっぱい飲ませてごめんね。俺、ズルい男だから……。離れる前にどうしても君が欲しかった」

「あっ」

解放されたバストに手を伸ばされ、包み込むように揉まれる。その手に何もかもを支配されてい
るみたいで抵抗できない。

「琴美……」

「あっ、ん……。や……。あ」

青山さんは胸を揉みしだきながら、首筋に口付けをしてくる。そしてその唇は耳へと移り、吐息まじりの声で名前を囁いた。背中がゾクゾクする。

「可愛い」

かわ……いい？ 私が？ そんなわけない。

「こんなに可愛い格好、俺以外の男の前でしないほしい」

胸の先を見つつけられて、指先で転がされる。くにくにと摘ままれたり、押しつぶすように触れられたりして、全身に快感が広がっていった。

「待っ……て。あっ……。だ、めえ……こういうの……」

久しぶりの感覚に戸惑う。

こういうことをしたのは、もう思いだせないほど前だ。大学生のときに付き合っていた人と経験して以来、何もしていない。その彼とは初体験をしてすぐに別れたので不慣れだし、苦手で……

「俺が嫌ってこと？」

「そ……じゃなくて」

「じゃあ、何？」

「こういう、の……慣れていない、から」

「もしかして、初めて？」

「初めて、ではないけど……でも」

経験人数は一人で回数も片手で数えるくらいな上に、痛かった思い出しかない。あのときみたい

に、痛みを耐えるのは嫌だ。

「痛いの、ヤだから……止めてほし……」

「セックスが痛いのか？」

「初めてのとき……痛かったから。だから……」

ああ、私、何を口走っているのだろう。酔った勢いで今までのことを言ってしまった。

「そう。分かった、優しくする」

「え……？」

「じゃあ、痛くない、本当のセックスしよう」

どういう、こと……？

彼の言葉の意味を考えているうちに、私の体は反転させられ、仰向けにされてしまった。

目の前には熱い視線で私を見つめる青山さんがいる。その瞳の奥に雄々しい欲情が宿っている気がして、目を逸らせなくなった。

こんな近くで彼の顔を見るのは初めて。

奥二重の綺麗な目は誠実そうで、少年のような雰囲気なのに、全体の印象は男らしい。口角がきゅっと上がっていて、今すぐに触れたくなるような魅惑の唇の持ち主だ。

非の打ちどころのない端整な顔立ちに思わず魅了される。

イケメンパワー恐るべし。

「好きだよ、琴美」

いつの間にか青山さんはスーツを脱いでいて、私は裸の彼にぎゅっと強く抱き締められた。これは夢？ そうだよね。こんなこと、現実では起こりえない。じゃあもう、この素敵な夢に溺れてみるっていうのもアリかも。

イケメンに弄ばれることを心配して青山さんを過剰に避けていたけれど、夢だったら傷つけられることはない。

「いっばい気持ちよくしてあげるから」

「はい」

「もう、本当に可愛すぎる」

私たちは見つめ合い微笑み合ったあと、恋人同士みたいに唇を重ねた。

キスをしているだけなのに、とろけてしまいそうなくらい気持ちがいい。ずっと触れ合わせていたいと思うほどの口付けに酔いしれていると、彼の手が再び胸を揉み始めた。

「ん……っ、ふう……」

彼の舌が私の中に入ってきて、舌を絡ませ合うように動いた。

青山さんとのキスに溺れて、何も考えられなくなっていく。

ふいに胸の先を指先で擦られ、声を上げそうになった。けれど唇を彼に塞がれ、舌を濃厚に絡められているので、言葉にはならない。

「う……ん、ふ……あ……」

胸の頂を押されたり、少しだけ強く擦られたりして、そのたびに体が大きく揺れる。

キスを終えた彼の唇は、私の首筋を通り過ぎていった。

「……あっ」

やだ、何この声？ 鼻にかかったとろけた声は、自分のものじゃないみたい。

「可愛い声。もっと聞きたい」

「……や、だ……あっ！」

とろりと熱い感触がしたので驚いて胸元を見ると、青山さんがツンと張り詰めた胸の尖りを舐めていた。色っぽい舌先をくるくると動かして、ちゅっと吸い上げる。

「あ、……あっ、んん……」

「声、抑えないで」

「で、も……。こんなの、恥ずかし……」

「大丈夫。すごく可愛いから」

可愛い、可愛いと何度も言われているうちに、可愛いの意味が分からなくなってくる。

私なんかに対して使う言葉じゃないと指摘したいけれど、ゾクゾクとした快感に吞まれて言葉が失う。

胸を舐められている間にも、彼の手が体のありとあらゆるところを撫でる。肩や腕、腰、それから太ももやお尻まで。

「琴美の肌、すごく気持ちいい。ずっと触れていたい」

「あ……ん……。はあ……」

際どいところを撫でられるたび、体が熱くなっていく。どうしよう、なんだか体がムズムズする。特にお腹の奥が熱くて、変な気持ちになってきた。こんなふうに関々まで体に触れられることなんて初めて。

それだけでは物足りなくて、もっと何かが欲しくなり始めている。しかしそれがなんなのか、うまく説明ができない。

突然、ショーツの上からクロッチ部分をすつと撫でられた。

「やあっ！」

な、何!? 今の。すごく気持ちよかった。

すでにそこは熱くなっていて、下着が張り付くくらい濡れている。

「青山さん! もう、やめて。こんなの……だめ」

「こんなに熱くなっているのに?」

「ああ、ん……っ、や、ああ……」

さつきは掠める程度の触れ方だったのに、今度は容赦なく触れてくる。布越しに何度も擦られ、ビクンと腰が大きく揺れた。

「すごく濡れているよ。よかった」

「よかつ、た……んですか?」

「そう。俺に感じてくれたってことでしょ? だからいっぱい濡れてくれたら嬉しい」

そう、なの……?」

前は緊張で体がカチコチだったせいか、全く濡れなかった。

これは夢だし、今日はお酒に酔っているからリラックスできているのかも。それに青山さんとうしてキスをしたり、肌に触れられたりしていると気持ちがいい。

恥ずかしい気持ちもあるけれど、優しくリードしてくれるから安心できる。

そんなことを考えている隙に、ショーツの中に手を入れられていた。

「あ! 青山さんっ——」

「ふふ、中はずっとすごいね」

彼は濡れそぼった秘部に指を這わせると、優しく媚肉を開いた。

「ああ……っ、やあ……!」

「本当、たまらない。君とこんなことしているなんて。俺、暴走しそう」

「だめ……っ、そんな、ふうに……しちゃ……」

くちゅ、くちゅと淫猥な音をたてて、ゆつくりと指が挿入されていく。たつぷりと濡れているせいか、痛くない。むしろ気持ちよくて早く奥まで来てほしいくらい。

さつき漠然と欲しいと思ったものは、これだったのかと気が付く。

「ちゃんと優しくするから、安心して」

「ああ、あ……っ、ん、ん……あ、はあっ……」

奥まで彼の指が入ると、体が勝手に戦慄き、中をきゅうつと締め付けた。

焦れるくらいにゆつくりと抜かれたかと思えば、ぬるぬるの指は再び奥へ進む。あまりの愉悦に

青山さんの体に抱き着くと、頬を摺り寄せられキスをされた。

「んっ……んん……」

青山さんのキス、なんて気持ちいいんだろう。ずっとしていたい。

映画で見えるような情熱的なキス。甘くて濃厚で、すぐく愛されているみたい。ふわふわした頭の中で、そんなことを繰り返す思う。

極甘な感覚にとろとろに溶けた。

「そんな顔で見つめないでくれる？ 我慢できなくなる」

「ふえ……?」

一体私はどんな表情をしているのだろうか？

困ったようにはにかむ青山さんは、再びキスをしながら指戯を始めた。

今度は媚壁を擦るみたいに緩やかに中をかき混ぜる。

「あっ、あんっ……やあ、ああ！」

「……大丈夫？ 痛くない？」

「あ、痛く、な……あっ、あっ」

「じゃあ、気持ちいい？ 続けていい？」

「ん……、……っ、ああ、……ああっ」

全然痛くない。気持ちよくて、やめないでほしいくらい。

優しい手つきで中を擦られたそは、ぐちゅぐちゅと音をたてて蜜を溢れさせていた。

このまま擦られていくと、どうにかなくなってしまいそう。

触れられている間に、太ももまで濡れてしまっている。とめどなく溢れる蜜に恥ずかしくなった。

「じゃあ、こども……いいかな？」

「ひゃあ!？」

脚を広げられ、もう片方の手で花芯を刺激される。

触れられた瞬間、電流が走ったみたいに快感が駆け巡った。

「や、あ……なに……に、これ……ああうっ」

「いっぱい気持ちよくしてあげる」

「あ、あ……あっ、はあ……ああん！」

甘い声が止められない。今まで体験したことのない快感に襲われ、目の前が霞む。意識が弾け飛んだ。

何も考える余裕がなくなって、息が上がる。

「だめ……っ、青山さ……ああ」

「大丈夫、俺に全部預けて」

強く逞しい腕にぎゅっと抱き寄せられて、愛撫もどんどん加速される。その熱い抱擁も、激しい愛撫も、時折与えられるキスも、全てが気持ちいい。

全部青山さんで染まる。

「あ、ああ——」

彼に導かれるまま、私はどこかへ飛ばされるような感覚に包まれた。

「……はあ、はあ……」

「琴美、すごく可愛かった」

何、これ……？ 一体、私はどうなったの？

指を抜かれた蜜口は、甘い痺れで熱いまだ。

今まで味わったことのない感覚に戸惑いながらも、この先に進んだらどんなふうになるのか体験してみたい気持ちでいっぱいになっていた。

——これは夢、だもんね。どれだけ乱れたとしても、平気だ。いつもの私と違って大胆になっても恥ずかしくない。

「気持ちよかった？」

「はい。すごく……。こんな初めてです」

「そう。良かった」

このまま最後までしたい。

青山さんは格好よくて、非の打ちどころのない人で、私とは天と地ほど差がある。地球がひっくり返ってもこんなことになるはずがないのに、まさか彼とエッチするなんて。どうしてこんな夢を見ちゃうのだろう。

苦手だからと遠くから見ているだけだったけれど、私、実は憧れていたの？

いやいや、そんなはずはない。そんな憧れを抱くことさえ申し訳ないくらいの人なのだ。

「入れている？」

「はい」

とろんとした目で彼を見つめると、それに応えるように口付けをされる。しばらくして、準備を終えたようで、彼はそっと脚の間に体を入れて体勢を整えた。

「リラックスして」

「……はい」

知らないうちに強張っていた体を撫でられて、私は力を抜こうと深呼吸する。すると彼のものが私の入り口を擦った。

「……あ」

熱くて硬いものがそこにある。私から溢れた蜜を自身に塗り付け、狙いを定めるように何度も動く。それを繰り返されているうちに、彼を受け入れる心の準備が整ってきた。

——早く来てほしい。

胸を高ぶらせながら、心待ちにしていると、ぐぐつと奥へ押し込まれた。

彼が来た瞬間、衝撃が走る。痛くはないけれど、指よりも遥かに太くて大きな屹立に驚いてしまった。

「……っ」

「大丈夫？ 痛くない？」

「痛く……は、ないけど……」

「ないけど？」

「……っ、青山さ……の、おっき……くて、っ……」

狭い蜜道を通る彼のものは、想像以上に太い。あまりの圧迫感に苦しくなる。

「ありがたい。それは俺にとっては褒め言葉だけど……今の状況的には、よくない意味だよね？」

「ちが……っ、あ、ああ……」

苦しいけれど、痛くはない。私の中に青山さんが来ているって、強く感じる。それよりも私の様子をうかがいながら、痛くしないようにと気を遣ってくれる彼の態度が嬉しい。

少し目を開いて彼を見ると、心配そうな表情でこちらを見ていた。こんなふうになんて、夢の中の青山さんは本当に素敵な男性だ。

「ねえ、俺のほうを見て」

「……はい」

言われた通りに青山さんを見上げると、彼の額には玉のような汗が浮かんでいた。

「こうして琴美と一つになれて嬉しい。琴美の中、すごく気持ちいいよ」

青山さんの言葉を聞いて、ぶわっとなりに体温が上がった。

私の中って……気持ちいいの……？

そんなこと、初めて言われた。それに青山さんってば、艶めかしさが増していて、ますますセクシーな表情になっているんですけど！

男性なのにとっても色っぽい。そんな顔見せられたら、ドキドキして照れてしまう。

「キスして」

「……はい」

ねだられて、私は目を閉じ唇を差し出す。ちゅ、ちゅと可愛らしい音をたてながら唇を重ね、舌を出して絡ませていると、接合部がだんだん彼の大きさに馴染んできた。

「俺……動かなくてもイキそうなくらい、興奮してる。ヤバいな」

「そ……なんですか？」

「でも大丈夫。頑張るから」

が、頑張るって何を……？

ぼんやり考えているうちに、彼の腰がゆっくりと動き始めた。

「あ、う……」

「大丈夫？」

「はあ……っ、あ、ああ……っ、んう」

最初はゆっくりと。でも少しずつ起伏をつけて浅いところで動いたり、奥まで差し込まれたりされる。一番奥の、もうこれ以上入れないというところまで彼が来ると苦しい。でもすごく深いところが密着していて嬉しかった。

「琴美……」

何度もキスをして、それから揺さぶられて。

苦しいばかりだったのが、だんだん新しい感覚に変化していく。これが快感なのだと分かるころ

には、彼の腰は大胆に動き始めていた。

「あんっ……あ、ああ……ッ、ン、は、あ……っ、ああ」

今までの苦しい経験はなんだったのと思うくらい快感に包まれ、行為に没頭していく。我を忘れた私はベッドのスプリングの激しい揺れに合わせて喘ぎ続けた。

「琴美、俺を見て」

汗で額に貼り付いた髪を直した彼が、私を熱く見つめている。

「よくなってきた？」

「あ、う……ン、あっ……！」

ずん、と深いところに打ち付けられる。固く閉じていた隘路は、すっかり彼に馴染んで開き、抽送されるたびに悦んでいた。

「痛いなら、この辺りにしておくけど？」

そのままじゃ抜けちゃう、と思うほど浅いところまで抜かれて、私は思わず腰を動かしてしまった。

「や……ああ」

「だって久しぶりだって言っていたから。あまり無理をさせてはいけないよね？」

「痛く……は、ない……から……っ、あ……あんっ……」

浅い場所も気持ちいいけれど、さつきしていたみたいにもっと奥に来てほしい。それに少し荒っぽくもされたい。

一番深いところが触れ合ったら、クラクラするほど気持ちよかった。だから、もっと……

いくら夢でもそんなことは言えなくて、私はモジモジとしながら腰を浮かせ、彼を見つめた。

「じゃあ、この辺？」

「ああっ、ふ、あ……ん、や、ああ……そこ、じゃ……な、……ああっ」

少し奥まで入れてもらえた。けれど、そこじゃない。もっともっと奥。私たちの肌がぴったりとくっつくほど貫いてほしい。

「琴美が教えて？ 君のこと傷つけないから、どこがいいか教えてほしい」

優しい表情と声だけれど、すごく意地悪だ。そんなこと恥ずかしくて言えないよ。悲しくなったら涙が浮かぶ。

「ねえ、ここでもいいの？ 琴美がしてほしいなら、もっと奥まで入れることもできるけど」

「ん……んう……っ、はあ、あ……」

焦らされ続けて理性が崩れ、体が本能に支配されていく。迫りくる欲求に、気が付けば口を開いていた。

「も、っと……奥に、……っ。いっぱい……して」

「いっぱい？」

「うん……青山さん、の……気持ちい、から、あ……、もっといっぱいしてほし……っ」

「……っ。いいよ。よくできました」

先生が生徒を褒めるみたいに頭を撫でられたあと、腰をぐっと掴まれる。すぐにずんっと全身が

揺れるほどの衝撃が走った。

「あ、ああっ……………」

目の前がチカチカと光って、快感だけが全てになっていく。少しずつ激しさを増すリズムに溺れて、愉悦に呑み込まれた。

「琴美……………」

吐息まじりの低い声が私の名前を呼ぶ。

「青山さん……………」

応えるように名前を呼んで、首に手を回し、ねだるみたいに彼の耳にキスをした。

「そんなことをしたら、イキそうになるだろう」

「まだ……………こうしていて」

離さないで、ずっと繋がっていたい。あなたとこうしているとすごく心地いい。一つになっているこの瞬間が、限りなく愛おしいと思う。

「分かった。琴美、おいで」

「……………あっ」

繋がったまま腕を掴まれて体を起こされた。向かい合って座るような体勢になる。

「あん……………っ、青山さ……………。これ、深い……………よお……………っ、あ……………あ」

「いっぱい入っているだろう？ 俺たちが繋がっているところ、よく見て」

動きを止めて脚を広げられると、彼が入っている場所が鮮明に見える。

「あ……………ああ……………恥ずかしい……………から……………っ、やあ、ん……………」

男性のそういう場所を見るのも、自分の体に男性が入っているのを目の当たりにするのも初めてで、とても恥ずかしい。

目を逸らすと、ふふつと笑い声が聞こえて頬にキスをされた。青山さんは私をいじめて楽しんでるみたいだ。

「俺と琴美、繋がっているよ」

「やあ……………っ、あ……………」

「可愛いよ、琴美。たまらない」

私の中の彼が先程よりも張りつめた。中をじつくりと擦って刺激を与えてくる。

「あ、ああ……………っ、ああ……………」

彼の屹立だけでも気持ちいいのに、同時に花芯まで刺激されて、きゅううつと膣内が収縮した。中の彼を離さないというように何度も締め付け包み込む。

「……………っ、締まっている。気持ちいい」

「ああっ、青山さ……………っ、はあ……………気持ちいいよお……………」

そこからはもう何がなんだか分からなかった。

再びベッドに押し倒されて何度も何度も激しく揺さぶられ、意識が朦朧としていく。

激しく揺れ動く腰に、軋むベッド。

あまりの愉悦に耐え切れず私は彼の腕をぎゅつと掴んだ。

「壊れ……ちやう……っ、も……だめえ……」

「いいよ、壊れて。俺も追うから」

「やあ……っ、あ、ああ——」

中が焦げるように熱くなり、強烈な快感が体中を駆け巡っていく。そのものすごいスピードに自分が自分でなくなつた。

「琴美、好きだ……」

「ああ……っ、あ、あああ！」

もう、だめ！

目の前が弾けて真っ白になる。

青山さんが「好きだ」と何度も言っている気がするが、はっきりしない。頭の中にふわふわと霞がかかっているようだ。

「イクよ、琴美——」

情熱的に激しく貫かれる。最後に奥まで押し込むと、私の膣内で彼が脈打った。

頭の中も体も痺れてとろけてしまったみたい。

彼がいなくなつても、下腹部はヒクヒクと余韻に震えて快樂の熱に侵されたままだ。

これが青山さんの言う「本当のセックス」というもののかな……

どうして恋人たちは体を重ねるのだろうと疑問に思っていたけれど、分かった気がする——でも夢なんだけだね。

これは、恋愛経験が少ないことをコンプレックスに感じていたらしい私の作り出した妄想。現実がこんなふうだったらしいのにな……

朝。

——朝？

ズキズキと痛む頭を押さえながら、雲の上にいるみたいなふわふわの布団から私は顔を出す。

えっと、昨日は青山さんの送別会で、初めてのワインに感動してたくさん飲んで、それから……？

ああ、だめだ。昨日のことを考えると頭痛がしてよく思い出せない。それにしても、いつもより温かいのはなぜだろう。

ごろん、と寝返りを打つと、何かに当たった。

「ん……」

ん？

聞きなれない声が聞こえて、勢いよく目を見開く。

い、今、男性の声がしたよね？ それから今私の体に当たっているのは、人の体？

え、え……何、十二、なに!?

パニックに陥りながら隣を見ると、そこにはなんと青山さん！

——ナニコレ。

思考停止中。

「へえっ!？」

嘘、嘘でしょ!!

私が最も苦手とする人種である、イケメンの青山蒼汰さんがなぜここに？　って、まずここはどこ？

真っ白いお布団に真っ白の壁。大きな液晶テレビがあつて、すごく大きな窓があつて——とにかく私の家じゃない!!

それからそれから、私、何も着ていない！　服だけじゃなく、下着も。

勢いよく起き上がって布団の中を見ると、見事な素っ裸だ。私は急いで布団で自分の体を隠した。まだ眠っている青山さんも、見えている範囲は裸……

ぎゃあああ。

まさか、これは、俗に言う「酔った勢いでヤッチャった」ってやつ!?

どうしよう、どうしよう！　今まで目立たず平和に穏やかに過ごしてきたというのに、何この大事件！

これは私のキャパを軽く超えていて、状況把握に時間がかかる。

ただ酔っぱらって介抱されただけ？　それにしてもガッツリ脱いじゃっているよね。あ、でも脱

がせただけってこともある——わけないよね、大人だものね。

それになんだか体に違和感がある。今まで使ったことのない筋肉を使ったせいであろう疲労と痛み。それから下腹部に異物感。

これは絶対にアウト——

状況を受け入れられずテンパっていると、青山さんが目を覚ました。

「田中さん、おはよう」

今すぐ出社できるくらい完璧なイケメンっぷりでにっこり笑う。

なんとも爽やかな寝起き。うちの弟なんて、寝起きはボサボサ頭でヨダレの跡なんかあつて、こんなに清潔感の漂う顔してたことないよ。

目覚めた瞬間から素敵だなんて、イケメンは凄い。……って、感心している場合じゃない。

「あの……あのあの！　私、たち……」

「体、大丈夫？　昨日、久しぶりだつて言っていたから心配で。無理させたんじゃない？」

「あうっ!!」

絶句。絶望。激しい後悔。

……やっぱりシちゃってます、よね……

「ここ……は、ドコですか……」

「ごめんね。昨夜、家の場所を聞き出せなかったから、ホテルに泊まったんだ」

H・O・T・E・L……ホテル。あわわわ……。ますますシちゃっている感が増している。

「田中さん、先に言うべきだったんだけどさ」

「は、はい……?」

今回のことはなかったことにしてくれ? もしくは、魔が差しただけだ、忘れてくれ?

ええ、ええ。もちろん、そうさせていただけます。この記憶はすぐに削除してゴミ箱に入れ、即ゴミ箱の中を空にします!

あとからこの記憶を呼び出そうとしても復元できないくらい抹消しますとも!!

幸い青山さんは来週から転勤されることですし、今後顔も合わせませんので何もなかったことにできます。どうぞご安心ください!

そう返事をしようとしたのに、先に言葉を告げられる。

「俺と付き合ってほしい」

「……は?」

よく分からない言葉を耳にしたので、聞き返す。青山さんは驚いた顔をした。

「えっ?」

「えっ?」

顔を見合わせて、暫くの沈黙。

——ツキアウ? 何それ、美味しいの?

言葉の意味を理解できずにフリーズしていると、青山さんが焦った表情でもう一度聞いてきた。

「……田中さん。俺と付き合ってもらえませんか?」

「おっしゃっている意味がよく分からないのですが」

「そのままの意味だけど」

「余計に分かりません!」

「ええっ!」

青山さんが訳が分からないという表情をする。けれど、訳が分からないのはこっちのほうが。

なんで、なんでそうなるの?

付き合うって、どこどこに行くから一緒に来て〜の意味の付き合うじゃなくて、男女が交際する

ほうの付き合うってことですよね? それは理解できたけれど、なぜに私?

はっ! まさかこんなふうに一晩過ごしてしまったから、責任を感じているの?

それなら心配ご無用です、私のことは気にせずに忘れてもらって結構です。

私は何事もなかったかのように振る舞いますから——

「あの、ずっと黙ったままでけど、何か変なことを考えていない? 大丈夫?」

「青山さんが変なことを言い出すからですよ。やだなあ、もう」

「変なことじゃない。俺は前々からずっと君のことが——」

「からかうのは、いい加減にしてください」

青山さんの声を遮って、私はベッドから抜け出した。急いで服を着始める。

「からかってなんかない。俺は本気で君が好きだ」

君が好きだ!

好きだ、きだ、きだ……とエコーがかかる。

その言葉の衝撃で、私の心が大きく揺さぶられた。

青山さんが、私を……？ そんな、まさか。あり得ない。

「あの、今回のことで責任取るような真似、しなくても大丈夫ですから。お互いさまですし、口外するつもりはありません」

「そういう意味で言っているんじゃない」

「じゃあ、どういう意味ですか？」

「初めて会ったときから、田中さんが好きだった。気が付かなかった？」

……え？

そんなの気が付くわけがないじゃないですか。スイギュウの群れの中に一頭だけバイソンが混ざっているくらい気が付きませんよ。

と、とにかく！ そんな分かりやすい嘘はいりません！

「俺、結構分かりやすいと思うんだけど」

「すみません、分かりません。というか、理解不能です。そういう嘘って悪質ですよ」

一瞬、大学生のときの彼のことの頭を過る。

「嘘じゃない。田中さん、ちゃんと話を——」

私は驚きのあまり止まっていた手を動かし身支度を終えると、青山さんを見た。

「青山さん、夕べはすみませんでした。転勤されてもお仕事頑張ってください。陰ながら応援して

います」

「いや、あの……だからね、田中さん」

「では、これ……足りないかもしれません。どうぞお納めください。お先に失礼いたします」

財布から二万円を取り出してベッドの上に置く。深々と礼をした私は、逃げるようにホテルから出た。

それから青山さんは転勤したので、その後顔を合わせずに済んだのだけど、代わりにSNSアプリにメッセージが何通も来た。

ちゃんと話をしたかったの、会いたかったの、お金を返すだの言われたものの、一つも返信をしていない。いわゆる既読スルーというやつだ。人生初の既読スルー。

青山さんのようなイケメンが私を好きなんて、絶対にあり得ない。前の彼みたいにからかっているとは思わないが、優しいから責任を取ろうとしているだけに決まっている。そんな付き合いは不毛だ。結局、お互いが傷付く。

それなのに彼からの連絡は途絶えることなく、何カ月も続いた。これでは埒が明かないと思った私は、一度だけメッセージに返事することにする。

——私、好きな人ができました。その方とはお付き合いしていて、ゆくゆくは結婚を考えています。だから、もう連絡しないでください。

そのメッセージはすぐに既読がついたけど、しばらく返事がなくて、私は嘘がバレたのかとハラ

ハラした。幸い数日後、「分かった。しつこくしてごめん。お幸せにね」と返事がきた。これで青山さんは、「同じ社内女性の軽い気持ちで手を出してしまった。責任を取らなければ！」という呪縛から解放されたのだ。

よかったですね！ これでお互いハッピーですよ！
心の中でそう彼に語りかけて、この大事件は収束した。

あれから二年。今、私は婚活パーティの会場にいる。

こんな場所で青山さんと再会するなんて、一体なんの報いなの……

しかも本社に戻ってきたと言っていた。これはまさか私の平穏な生活が危ぶまれる事態では？

「——で、どういうことなの？」

「え？」

「田中さんがお付き合いしてるって言ってた彼、別れたの？ それとも、最初から嘘だった？」

「そ、それは……」

——私、好きな人ができました。その方とはお付き合いしていて、ゆくゆくは結婚を考えています。だから、もう連絡しないでください。

二年前に彼にそうメッセージを送ったことを思い出す。

まさかあのときは、二年後に婚活パーティで再会するなんて夢にも思っていなかった。こんな状況に追い込まれると分かっていたら、あんな嘘をつかなかったのに。

でもあのときはそれがベストだと考えたのだ。致し方なかった。

「ま、いいや。今はお互い恋人がいないということだよ。じゃあ、俺のこともそういう対象にしてもらえる、ということだ？」

素敵スマイルで微笑みかけられて、私は不覚にも見とれてしまった。

久しぶりに見た青山さんは、以前よりも男らしさが増していて、ますます格好よくなっている。漂う大人の色気と、上品な仕草に会場の女性達が釘付けになっていた。

彼は、女性たちのまとわりつくような視線に気が付いていないのだろうか。

ここに来ている女性たちは特に男性と出会いを求めているのだから、その視線は露骨だ。

こんなに魅力的な男性に言い寄られて嫌な気分になる女性はいないはず。むしろ女性のほうからお願ひしてお付き合いしてほしいくらいの人だと思う。

「ただ、ただ……！」

「すみません、それは無理です」

「えっ!？」

そう即答して、私は彼のもとから逃げ去った。

すみません、青山さん。本当にごめんなさい。私はだめなんです。

イケメン、だめ、絶対!!